

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 かのう のぞみ
加納 希美

高度に孤立語的であり、形態論的な文法手段に著しく乏しく、真に文法形式とみなし得る機能語の類にも乏しい中国語においては、実質的な意味をもつ表現形式の多くがさまざまな文法的意味や構文的意味の構造化に動員される。数量表現もその一つである。本論文は、中国語の数量表現が行為の属性や事物の様態の描写という構文的意味の構造化に与して担う文法的機能、すなわち構文機能を明らかにしようとするものである。

まず序章において考察の目的を述べ、第1章では、“他一次头发也没洗过。”（彼は一度の髪さえ洗ったことがない→彼は一度の洗髪さえしたことがない）のように、数量表現を極端事例として取り立てるタイプの否定構文を取り上げる。上例下線部のように、行為の回数を表す数量表現（「一度」）が、行為ではなく事物を意味する名詞（「髪」）を修飾する本構文は、従来意味と構造のミスマッチの事例とされてきた。本論文は、ここでの名詞（「髪」）を、メトニミックに〈行為〉（すなわち「洗髪」という行為）を表すものと捉え、併せて、数量表現と名詞が一纏まりの句構造を成して取り立てられることこそが「最低でも一度の洗髪」という行為属性の読みを可能にし、延いては極端事例の否定という構文的意味の成立を支えるという新たな構造解釈を示し、本構文の意味と構造の整合性を明らかにする。第2章では“我坐了三个月的船。”（私は3ヵ月の船に乗った→私は3ヵ月も船に乗った）のように「行為の実行時間を示す数量表現+“的”+事物名詞」という形の名詞句（下線部）を目的語に取るタイプの構文を取り上げ、ここでも事物名詞（「船」）はメトニミックに〈行為〉（「乗船」という行為）を表し、それを修飾する数量表現は「3ヵ月もの乗船」という意味において行為の属性を描写するという事実を構文論と談話論の両面から論証する。第3章から第5章では、“一身”（からだ中）のように、“一”と名詞または名詞性付属形式の結合から成る数量表現を構成素とする数種の構文を取り上げる。第3章と第4章では数量表現が表す種々の様態——判断文における存在の様態、非対格文における結果的様態、動作対象に及ぶ加害的もしくは被害的様態など——の意味を明らかにし、第5章では、前二章で扱った構文のいずれとも異なるタイプの構文に関して、当該の数量表現が結果補語として再分析されている可能性を指摘する。終章で議論の全体を整理し、今後の課題を提示する。

第5章の議論に詰め甘さと若干の粗さが見られるものの、従来看過されてきた数量表現の種々の構文機能を新たに見出し、それらを意味と構造の両面において的確に特徴づけ、併せて、数量表現を取り込んで構成される文構造の多様な構文的意味を発掘した本論文の成果は、中国語学における文法研究に大きく貢献するものとして高く評価される。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。